

## 主 題：アブラハムの救い6 救いは神の力による

聖書箇所：ローマ人への手紙 4章18－25節

神のおことばは信頼に価するのかどうか？本当に信じて信頼を置いて大丈夫なのかどうか？そのような質問に対してパウロはこのように答えます。「**たとい、すべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきです。**」（ローマ3：4）と。パウロは私たちの主は真実なお方である、すなわち、絶対に嘘をつかないお方である、言われたことを撤回したり守らないお方ではないと言います。この真理は私たちの心を大いに励まします。神は真実である、神の言われることは真実であるから、どんなときにも信頼を置くことが出来ると言うのです。しかし、実際はどうでしょう？私たちは神の約束を耳にし見たとき、最初は確信をもって信じてはいても人間的に不可能だという思いが強くなればなるほど、その確信がぐらついて来ないのでしょうか？いつの間にか、私たちの心の中に「これは本当だろうか？」「本当に信頼していいのだろうか？」と、そのような思いが出て来るような経験をされたことはありませんか？たとえば、私たちは神がすべての約束を満たしてくださるといふ約束を知っています。しかし、職を探している人たちは無職の時間が長ければ長いほど段々不安になって来ます。今の世の中は厳しい不況ですから、仕事を探してもなかなか見つかりません。また、年齢的にも難しい状況です。そうすると神がすべての約束を満たすといふその約束を知っていても、現実を見たときに「本当だろうか？」とそのように思ってしまいます。また、私たちのこの群れには青年たちが与えられています。感謝なことです。多くの皆さんが結婚を祈っておられます。ところが、祈っても祈ってもその願いがなかなか叶わないと、神は必要を満たすと言われたけれども本当にそうなのだろうか？このまま神の約束を信じていていいのだろうか？と、このようなことは私たちは大なり小なり経験したことがあると思います。不可能というその大きな壁を見つけたとき、その重みにつぶされてしまいそうになる、その不可能が私たちから望みや希望を奪って行く、そのようなことを皆さんは経験されていませんか？「これはもう無理だ、ダメだ、不可能だ」と言って神への信頼が揺らいでしまう…。信仰者アブラハムもそのような状況に遭遇しました。彼自身、不可能だと思うことを経験したのです。しかし、その中であって彼は希望を、望みを失うことがなかったのです。彼がどのように歩み続けて行ったのか、彼のこの歩みは間違いなく私たちにとって大きな励ましとなります。彼の生き方は私たちにとってすばらしい模範なのです。

今日も私たちは、この愛するアブラハムの信仰の歩みを見て行きます。

## ☆救いに関する三つの真理

1. 救いは信仰による 1－8節
2. 救いは恵みによる 9－17節
3. 救いは神の力による 18－25節

ローマ4：18を見ると、最初にこのように記されています。「**彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。**」と。おもしろいことばが最初に記されています。新改訳聖書では「**望みえないときに**」と訳されています。これは「望みに反して、望みをもてないときに」という意味です。なぜ、このようなことが記されたのでしょうか？アブラハムが直面していたその状況をもう一度思い出してください。神はアブラハムに約束をお与えになりました。「**さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。**」さらに仰せられた。「**あなたの子孫はこのようになる。**」（創世記15：5）と。しかし、そのとき、もうすでにアブラハムはおよそ百歳、妻サラは九十歳でした。どのように考えても、だれが見ても、この二人に子どもが生まれるということは不可能に思えました。実は、アブラハム自身もそのことを熟知していました。19節にそのことが記されています。「**アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだ死んだも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、**」とあります。アブラハムはあることを「認めて」いたのです。あることを知っていたのです。パウロは二つのことを挙げています。「**自分のからだ死んだも同然であること**」と「**サラの胎の死んでいること**」です。アブラハムはもう「自分のからだすでに」とそのような副詞がここに使われているのですが、「すでに死んでいる」と完了形を使っています。また同様に、「**サラの胎の死んでいる**」とアブラハムはよく分かっていた、サラも分かっていた。自分たちの肉体は生殖能力においてはすでに死んでしまっている、子どもをもうけることはもう不可能であることをよく知っていたのです。だから、望みに反して、つまり、望みをもてないときに、子どもをもうけるという望みが全くない、そのような状況の中で神は再び約束を与えたのです。どのような約束だったでしょう？先ほども言った通り、この二人に子どもが生まれるという約束でした。そのときにアブ

ラハムはどうしたのでしょうか？18節のみことばが教えてくれました。「望みえないときに、望みに反して、望みをもてないときに、アブラハムは望みに信頼を置いた」と言うのです。「望みに信頼を置いた」とは、直訳するとその通りですが、何を言わんとしているのでしょうか？18節の後半を見てください。

**「それは、『あなたの子孫はこのようになる。』と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。」**と、つまり、パウロがここで言っていることは、アブラハムがおよそ百歳になり、そして、子どもが空の星のようになるという約束の成就が困難である、不可能だと思えるようになったとき、アブラハムは再びその約束を思い出して、その約束の主に望みを置いたと言うのです。約束を与えてくださった神に望みを置いたのです。18節に**「彼があらゆる国の人々の父となるためでした。」**とありますが、これが彼自身もっていた目標なのです。まさに人生の目標に向かって人々が進んで行くように、アブラハムはこの約束が成就することを信じて、それを目標にして生きていたと言うのです。あの星のように子どもが増えて行くという約束、どうして彼はこの約束が成就するという確信をもったのでしょうか？アブラハムは言います。なぜなら、これは神の約束だからと。

18節には二つの「望み」が出て来ました。最初の「望み」は人間的な望みのことです。私たちがどう思うかです。可能なのか不可能なのか？希望をもてるのかもてないのか？私たちの判断です。でも、二つ目の「望み」は神から与えられる望みです。神が人に強い確信をもたらしてくださるのです。アブラハムは人間的に見ると全く希望がもてないような状況にあって、神を見てそこに希望を見出したのです。間違いなく、アブラハムは信仰の人でした。神が言われたこと、神の約束は必ずそうなること心から信じた信仰の人です。思い出しませんか？マリヤがエリザベツを訪問したとき、エリザベツが聖霊に満たされてマリヤにこのようなことを言いました。ルカ1：45**「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」**と、神はそのような人をお喜びになるのです。アブラハムはこのような絶望的な状況にあって、今の世の中が教えるように、肯定的にポジティブに物事を見たり受け取ったりすること、また、楽天的に物事を捉えるような努力をしようとしたのではありません。考え方を換えればいいのだ、物事を肯定的に見るなら悪いこともよく見えるからと、そのようなことをアブラハムはしたのではありません。病に対する完全な勝利がその病の根治であるように、人間関係の問題の解決はその人を避けることではなくて和解であるように、主に対する解決は、主について考えないことではなく、永遠のいのちを確実に手に入れることです。人生の様々な試練に対する解決は、考え方を換えることではなく、絶対者であり主権者なる神に信頼を置くことなのです。私たちの周りには様々な問題があります。様々な問題が起こって来ます。その問題に私たちが本当に勝利しようとするなら、解決法は一つです。私たちの考え方を換えることではありません。その状況を変えることの出来る絶対者なる方、そして、すべてのことを働かせて益とするという約束を与えてくださった主権者なる神に信頼を置くことです。実は、アブラハムはそのようにして生きたのです。

もう一度ローマ書4章を見てください。アブラハムは自分が置かれている状況から目を背けることはしませんでした。考え方を換えることで現実がもたらす悩みから一時的に解放されようとしたのでもありませんでした。彼は自分の置かれている状況をしっかりと正しく直視しています。先にも見た通り、19節にアブラハムは**「認めて」**いたと書かれてありました。つまり、よく考えていた、よく観察していた、よく考察していたのです。何を考えていたのでしょうか？**「自分のからだ死んで」**いることと**「サラの胎の死んでいること」**、つまり、今見たように、アブラハムは自分たちにはもう子どもをもうけることは不可能であるという現実を見据えていたのです。しかし、それで終わったのではありません。その次を見てください。そのことを**「認めても、その彼の信仰は弱りませんでした。」**と書かれています。この**「弱る」**ということばは「疑いからくる動揺、ぐらつき」という意味です。疑いによって確信がぐらついてしまうのです。パウロは言います。人間的には不可能な状況に置かれていたが、アブラハムの確信はぐらつくことがなかった、弱ることがなかったと。でも、サラはどうだったでしょう？サラはアブラハムのようではなかったのです。創世記18章にサラのことがこのように記されています。三人の人がアブラハムを訪問した様子が18章1節から記されています。アブラハムのもてなしを受けた三人はアブラハムにこのように尋ねました。9節**「…「あなたの妻サラはどこにいますか。」それで「天幕の中にいます。」と答えた。」**そうすると三人の中のひとりが**「…「わたしは来年の今ごろ、必ずあなたのところに戻って来ます。そのとき、あなたの妻サラには、男の子ができています。」**と言います。「**「サラはその人のうしろの天幕の入口で、聞いていた。」**と記されています。11-15節**「アブラハムとサラは年を重ねて老人になっており、サラには普通の女にあることがすでに止まっていた。：12 それでサラは心の中で笑ってこう言った。「老いぼれてしまったこの私に、何の楽しみがあろう。それに主人も年寄りで。」：13 そこで、主がアブラハムに仰せられた。「サラはなぜ『私はほんとうに子を産めるだろうか。こんなに年をとっているのに。』と言って笑うのか。：14 主に不可能なことがあるか。わたしは来年の今ごろ、定めた時に、あなたのところに戻って来る。そのとき、サラには男の子ができています。」：15 サラは「私は笑いませんでした。」**と言って打ち消した。恐ろしかったのである。しかし主は仰せ

られた。「いや、確かにあなたは笑った。」、サラは心の中で笑ったというのです。この神のことば、この約束が彼女にはただの気休めにしか思えなかったのです。神の約束を信じることができないで疑ったのです。しかし、私たちのだれがいったい彼女を責めることができるのでしょうか？私たちは神の約束を聞いてどれ程「神さま、それは無理です」と疑ったことでしょうか？彼女は人間的に不可能な状況にあって、その約束を聞いたときに「神さま、それは無理です。それはただの気休めにすぎません。あなたが言われることは信じがたいことです。私には信じられません。」とそのような思いを彼女は抱いたのです。

では、アブラハムはどうだったのでしょうか？この前の17章にアブラハムのことが記されています。アブラハムも実は笑っているのです。17：15－19「また、神はアブラハムに仰せられた。「あなたの妻サライのことだが、その名をサライと呼んではならない。その名はサラとなるからだ。：16 わたしは彼女を祝福しよう。確かに、彼女によって、あなたにひとりの男の子を与えよう。わたしは彼女を祝福する。彼女は国々の母となり、国々の民の王たちが、彼女から出て来る。」：17 アブラハムはひれ伏し、そして笑ったが、心の中で言った。「百歳の者に子どもが生まれようか。サラにしても、九十歳の女が子を産むことができようか。」：18 そして、アブラハムは神に申し上げた。「どうかイシュマエルが、あなたの御前で生きながらえますように。」：19すると神は仰せられた。「いや、あなたの妻サラが、あなたに男の子を産むのだ。あなたはその子をイサクと名づけなさい。わたしは彼とわたしの契約を立て、それを彼の後の子孫のために永遠の契約とする。」と、確かにアブラハムもこの話を聞いたに笑ったのです。でも、アブラハムの行為とサラの行為とは違いました。アブラハムも自分たちの年齢を考えたときに子どもをもうけることは出来ないという現実を知っていました。それは間違いではありません。本当のことです。だれが考えても二人の間に子どもが生まれることは絶対でないことです。アブラハムのこの主に対する答弁は、ちょうど、あのマリヤが「あなたは男の子産む」と天使から告げられたときの態度と同じです。ルカ1：31「ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。」、34節「そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」、私はまだ処女なのにどのようにして子どもを産むことができましょう？と。彼女の言ったことは正しかったのです。人間的に不可能だからと神を疑っているではありません。どうしてそのようなことがありましょう？と、つまり、マリヤにしてもアブラハムにしても神のご計画が理解できなかったのです。なぜなら、現実を見たときに、それは不可能だ、神がどのようなことをなさろうとしているのか分からなかったのです。だから、アブラハムはイシュマエルを通してこの約束が成就するようと言っています。「どうかイシュマエルが、あなたの御前で生きながらえますように。」（創世記17：18）と。ところが主は「いや、あなたの妻サラが、あなたに男の子を産むのだ。あなたはその子をイサクと名づけなさい。わたしは彼とわたしの契約を立て、それを彼の後の子孫のために永遠の契約とする。」とサラから男の子が生まれると改めて語ったときに、アブラハムはその神のおことばに対して「私はそれを信じません」という態度を取っていないのです。アブラハムはこの約束を信じたのです。自分の理解を超えていること、自分にはとても分からないことです。でも、神がそのように言われたのだからと、彼はその約束を受け入れたのです。

ローマ書4章に戻ってください。アブラハムは自分も妻のサラも子どもをもうけることができないということ、それは不可能であるということをよく知っていましたが、彼は神に信頼を置きました。なぜ、彼は神に信頼を置くことができたのでしょうか？それはこの17節、すでに見たみことばですが、それが明らかにしています。「このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。」、アブラハムは自分の神がどのような神であるかをよく知っていました。すでに私たちも学びました。神はみこころなら死んだ人を死からよみがえらせることができる、私の神は何もないところに命じるなら存在するようになると言います。このような神だ、不可能の何ひとつない神だと言います。確かに、死んでいる肉体だけれど神はこのからだ用いてみこころを行なうことができると信じたのです。人間的に見て不可能なことでも神ならできると。子どもを産むことができないからだであるけれども、神がそれを良しとされるならそれが可能になるのだと言うのです。だから、それが私の神だとかのような信仰をアブラハムはもっていたのです。神のみこころは必ずなるという信仰です。神がなさろうとするなら必ずそれはなるという信仰です。信仰は問題や困難や様々な試練から逃避することではありません。その困難の中であって、その問題の中であって、その試練の中であって、そのすべての背後にいる主権者なる神と、その約束を見ることなのです。

皆さんもよく覚えておられると思いますが、ヘブル人への手紙11：1で著者は信仰とはどういうものなのかを定義してくれています。「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」、「望んでいる事がらを保証する」、簡単に言うと、神のみこころは必ずなるという確信です。私の欲しいものが与えられるということではありません。神のみこころは必ずなるというその確信、それが信仰の土台です。同時に、「目に見えないものを確信させる」と言います。目に見えたから信頼する、見えないから信頼しないというのではないのです。目に見えようと見えまいと、神が言われたことだからそれを

信じて歩んで行くというその確信です。それが信仰だと言うのです。言い換えれば、今私たちが学んでいるように、私たちがどう思うかではないのです。人がどう言うかではないのです。神が言われたことは必ずそうなる、それが信仰なのです。私たちがどのようなときでも、自分の思うように物事が進まないときでも、自分の心を動揺やそのぐらつきから守るのは神のおことば、また、神に対する深い信頼です。神のみこころは必ずなるというその確信こそ、私たちをしっかりと保ってくれるものです。いかに困難であろうと、道理に反することであろうと、常識外であろうと、神が言われたことは絶対になるという確信です。このような信仰をアブラハムはもっていたのです。だから、彼は神に喜ばれたのです。

今日のテキスト、ローマ書に戻って、20節「**彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、**」、今、私たちが見て来たように、このような私でも、このように老いた者であっても、このように子どもをもうけることが不可能である私たちであっても、神は私たちにみこころをなされると、このような信仰をもっていたアブラハムに神はどのようなことをされたでしょう？彼の信仰はますます強くなっています。20節「**反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、**」と、このように神を信頼する人の信仰は神によって強められて行くのです。このような確信をもって歩む人々を神はますます祝して、その信仰を強めていってくださるのです。アブラハムは不可能なことに直面したときに、神を疑ってしまうというように信仰が弱るようなことはなく、かえって彼は神に期待と信頼を置きましたが、そのことは確かに私たちも頭ではよく分かります。どのようなときでも神を信頼して歩めばいいのだということは分かっています。でも、実際には非常に難しいことも私たちはよく知っています。いつでもどのようなときでも神に信頼を置いて生きて行くということは、頭では分かっているし、私たち自身、そのように言いますが、実践は難しいことです。でも、私たちが覚えておきたいことは、私たちの信仰の先輩たちの中にそのように生きた人たちがいるということです。このような生き方、アブラハムが歩んだような信仰の歩みはあなたにとって不可能なことではないのです。そこで私たちが知りたいことは、では、どのようにすればそのような歩みができるのかということです。感謝なことに、みことばがそのことを教えてくれています。二つのことを言います。

◎どのようにすれば、神に信頼を置いて歩むことができるのか？

#### 1) 神がどのような方かを知ること

詩篇46篇のみことばを見ましょう。

- 46:1 神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。
- 46:2 それゆえ、われらは恐れぬ。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。
- 46:3 たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して山々が揺れ動いても。
- 46:4 川がある。その流れは、いと高き方の聖なる住まい、神の都を喜ばせる。
- 46:5 神はそのまなかにいまし、その都はゆるがない。神は夜明け前にこれを助けられる。
- 46:6 国々は立ち騒ぎ、諸方の王国は揺らいだ。神が御声を発せられると、地は溶けた。
- 46:7 万軍の主はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりでである。セラ
- 46:8 来て、主のみわざを見よ。主は地に荒廃をもたらされた。
- 46:9 主は地の果てまでも戦いをやめさせ、弓をへし折り、槍を断ち切り、戦車を火で焼かれた。
- 46:10 「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。」
- 46:11 万軍の主はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりでである。セラ

2-3節には、私たちに動揺や恐れをもたらす出来事が私たちの周りに、また、この地上に起こることが記されています。ここに「**たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも**」と記されているのは、ある神学者はこれは自然の大災害のことを指しているのだろう、地震とか洪水であると言います。また、これは私たちの想像を絶するような迫害や困難を指しているのではないかとともに言います。恐らく、この詩篇の著者が言いたかったことは、たとえ、どのような災害が私たちの周りに起ころうとも、私たちの心を騒がせるようななどのようなことが起ころうとも、それは迫害かもしれない、様々な困難かもしれない、自然界の様々な災害かもしれないが、私たちの心を騒がせるどのようなことが起ころうとも、私たちはその中にあって心をぐらつかせることがなく心を保つことができるということです。なぜなら、私たちの神はこのようなお方だと1節に記されています。

- (1) **われらの避け所**：神は神を信じる者、聖徒たちを守ってくださる、敵からの避け所なのです。どのような敵がやって来てもあなたを守ってくれるそれが神だと言うのです。
- (2) **力**：私たちの神はご自身の全能の力をもって私たちを守ってくださると言います。弱い私たちが行動できるように力を与えてくださる、そのような神だと言います。
- (3) **苦しむとき、そこにある助け**：助けを与えてくださる方だと言います。神はあなたが弱い者であり、臆病で傷つきやすい者であり、無力な者であることを知っておられます。そのようなあなたに神は助けを与え続けてくれると言うのです。

「**それゆえ、われらは恐れぬ。**」、心配しなくてもいい、あなたはこの全能なる神によって守られてい

るからと。感謝なことです。私たちが一生懸命神に自分のことを説明しなくてもいいのです。なぜなら、この神は私たちよりも私たちのことを知ってくださいているからです。私たちの愚かさを私たち以上に知っておられ、私たちの必要を私たち以上に知っておられるのです。そのような神があなたを守ると言われるのです。私たちの上にどのようなことが起ころうと、自然界に何が起ころうと、私たちの周りやこの社会に何が起ころうと、また、私たちの家庭に何が起こって来ようと、どんな問題があろうと、私たちは恐れることはないのです。恐れなくてもいいのです。神が私たちとともにいてくださるからです。**「そこにある助け」とあります。この助けは直ちに与えられるものだからです。このような神によって守られていることは何という感謝でしょう！全能の唯一真の神が私たちを守ってくれているのです。このようなすばらしいご配慮のもとに私たちは今日を生きることができのです。この詩篇の著者はそのことを分かっているのです。だから、「それゆえ、われらは恐れぬ。」、何があっても恐れぬと言うのです。また、4節には「川がある。その流れは、いと高き方の聖なる住まい、神の都を喜ばせる。」とあります。神は私たちの必要を満たしてくださいと云います。そして、7節と11節にはこの神はご自分の愛する者、聖徒たちといつもともにいてくれると云います。「万軍の主はわれらとともにおられる。」と。また、著者はこの方はすべてのものを支配しておられる方だと言います。9節「主は地の果てまでも戦いをやめさせ、弓をへし折り、槍を断ち切り、戦車を火で焼かれた。」と。そして、10節でこの方だけがすべてのものによって崇められるのに相応しいと言います。「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。」と。**

皆さん、少なくともこのような神が私の神だと覚えるだけでも私たちの確信は増しませんか？いったい私は何を心配しているのだろうか？何を恐れているのだろうか？確かに、不可能と思えることが私の前にあるけれど何を怖気づいているのだろうか？私はこのような全能全知の神によって守られているのだ、この方が私とともにいてくださるのだ、この方が私を守り私を導いていてくださるのだと確信します。皆さん、私たち現代のクリスチャンの大きな問題は、このような神を正しく知っていないところにあります。私たちの神観念が間違っていてしまっているのです。A.W トウザーという牧師がこのように言いました。礼拝に関して「礼拝は礼拝者が高い神観念を抱くかあるいは低い神観念を抱くかによって、純粋なものにもまた不純なものにもなる。神を崇めるのであればどのような神を崇めているのか、そのことをしっかり知っていなければ、同じ行為を行なってもその行為を神はお喜びにならないことになってしまう。」と。あなたはどのような神を信じていますか？あなたの神はどんな神ですか？と質問されたらどのように答えますか？私たちは神の属性を暗記してそれを並べることができるかもしれませんが、しかし、問題はそのようなことを知っているかではありません。あなたがどのような神を恐れながら日々生きていくかです。あなたが信じている神はどういう神なのかです。かつての信仰の勇者たちは神を正しく知っていました。ゆえに、神の前に彼らはへりくだり、神に信頼し、この神に確信を置いて生きたのです。なぜなら、それに相応しい神だからです。トウザーはこう言います。「今日のキリスト教会の上のしかかっている最も重い義務は、キリスト教会の神概念をもう一度神に、そして、教会に相応しいまでに聖め、かつ高めることだ。」と。

私たちに必要なことは、この聖書が教えてくれる真の神、私たちの神がどんなにすばらしい神なのか、どんな偉大な神なのかということを知り続けることです。それができるのは、この神のおことばを通してだけです。あなたはこの神のことをもっと知りたいと、そのような願いをもってみことばを学んでおられますか？もう十分だと思いませんか？なぜなら、もう神学書を覚えたからと。皆さん、どのような神を信じているのかは、どのように生きていくのが明らかにします。どのような神を信じているのかは、あなたが問題に遭遇したときにそれにどのように対処するのかによって明らかになります。あなたの知識では決してないのです。あなたが信じているものは形となって現われて来るからです。

アブラハムは人間的に不可能だと思えるメッセージを聞いたときに、その不可能によって神を疑わなかったのです。彼はその背後におられる全能の神を見て不可能とは思わなかったのです。人間的には不可能であっても、神を見てこの神のみこころなら不可能は可能であると言うのです。聖書が教えている神はそのような神です。私たちが造った神、私たちが救ってくださった神はそのような方です。あなたはどのように信じていますか？そのようにあなたは神を崇めていますか？この神に信頼を置いていますか？神を正しく知ることは必要なことです。恐らく、私たちはこの地上に置かれている間、もっと神のことを知らなければいけないでしょう。何度も繰り返しますが、どれだけのことを覚えるかではないのです。覚えたその真理が私たちの中で消化されて、私たちの力となっているかどうかです。私たちが信仰者としてどのようにこの大変な世の中にあって希望をもって望みをもって生きていくかです。神を知ること、それが揺るがない信仰をもつための大きなカギであると教えます。アブラハムは神を知っていました。

## 2) みことばの実践

二つ目に必要なことは「主の教えを実践すること」です。ヨハネ13：17、イエスは愛する弟子たちの足を洗った後「あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行なうときに、あなたがたは祝福されるのです。」と言われました。私たちにとって大切なことは、みことばをただ聞くだけであってはならないのです。聞いたみことばを実践することです。そのことはヤコブが私たちに教えてくれました。皆さんもよくご存じでしょう。ヤコブの手紙1：21-25「ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。：22 また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。：23 みことばを聞いても行なわない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。：24 自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようであったかを忘れてしまいます。：25 ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行ないによって祝福されます。」、ヤコブはここで私たちがみことばを実践して行くために必要な助けを与えてくれています。(1) すなおに：彼はまず、みことばを「すなおに受け入れなさい。」と言いました。つまり、私たちにとって必要なことは、自分の考えが一番で何があってもその考えを変えないとするような頑なな態度でみことばを聞こうとするのではなく、神に対して「すなお」な従順な態度です。「神さま、どうぞ教えてください。」とそのように学ぼうとする態度をもってみことばに接しなさいと言います。神のみことばを謙虚な態度で聞こうとすること、それが必要だと言うのです。「どうぞ神さま、語ってください。私はあなたの真理を知りたいです。そして、あなたの真理に従って行きたい、ですから、教えてください」という、そのような謙虚な態度が必要なのです。そして、(2) 見つめて離れない：二つ目に、実践するために必要なことは25節「ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。」、しっかりとみことばを見つめなさいと言います。「一心に見つめる」と言うのです。みことばをしっかりと学んでそのみことばを考えなさい、考え続けて生きなさいということです。聞いたみことばをすぐに忘れてしまうのは私たちの弱さです。でも、みことばを実践しようとするなら、そのみことばに思いを馳せることが必要です。みことばを考え続けて行くことが必要です。「一心に見つめて離れない人」とあります。みことばを考え続ける人であり、みことばを真剣に見つめ続ける人です。みことばを実践しようとする人が、今日聞いたみことばを次の瞬間に忘れていたら実現することなど不可能です。私たちは努力しなければいけません。聞いたみことばをしっかりと忘れないように保ち続けて行くことです。神は真理を与えてくださった、だから、この真理を私は守って行きたい、それなら、その真理をどのように覚え続けて行くのか、その努力がなければみことばを実践することはないと言うのです。私たちがアブラハムのように、どんなときにも恐れることなく確信をぐらつかせることなく神を信頼して歩んで行くことができるのか？それは、神を知ることであり、そして、神のみことばを実践して行くことです。皆さんも恐らく経験があると思います。神のみことばを聞き、神がこのようなことを私に命じておられると知りました。そして、私たちは決心します。「神さま、そのように私は生きて行きたいです。どうぞ私を助けてください。」と。そして、そのみことばを覚えながら、日々の歩みにおいてそれを実践するように心がけて行くときに、私たちの行ないは少し変わりませんか？そのようにして神を意識しながら、そのみことばを意識して歩んで行こうとするときに私たちは変えられて行くのです。なぜなら、少なくとも私たちは、神の目を意識始めるからです。神が何を望んでおられるのかを覚えていることによって、そこから外れそうになったときに、ああ私は間違っているということに気がきます。そのようにして歩んで行くことによって、私たちは神が身近な存在であるということを確認するだけでなく、神が言われたことが実際に自分の生活に為されて行くことによって、この神に対しての信頼を増して行くのです。残念ながら、多くのクリスチャンはただみことばを聞くだけで終わっています。それだけで満足しています。だから変わって来ないのです。アブラハムはそのような人物ではなかった。信仰の勇者たちも。彼らはみことばを聞いて、そのみことばを実践して行ったのです。

ローマ書4章に戻ってください。確かに、アブラハムには不可能と思えることでした。しかし、彼は神の約束を見、その約束を与えてくださった神を見たときに、確信をぐらつかせることはなかった、彼の信仰は弱らなかつた、かえって彼はその神をますます信頼して歩んだのです。その結果はどうになりましたか？20節の後半にある通り「神に栄光を帰し」たのです。このような歩みをなす信仰者を神は喜んでくださるのです。このような信仰の歩みをなす人々を神は用いて神の栄光を現わすのです。アブラハムは間違いなく神の栄光を現わす人でした。なぜなら、どんなときにも彼は神を信じ神に信頼をおいて生きたからです。21節にそのことが記されています。「神には約束されたことを成就する力があることを強く信じました。」、神は嘘をつかない、神は約束されたことを必ず実行なさる、このように確信を置いて神に従い続けたアブラハム、神は彼を用いてご自身の栄光を現わし続けて行かれたのです。

クリスチャンの皆さん、あなたはどのように歩んでいますか？あなたの信仰の歩みはどうですか？

どんなときにもあなたは神に信頼を置いて、確信をもって歩んでいますか？それとも、何か大きな敵があなたの信頼をぐらつかせていませんか？神が見えなくなっていますか？私たちは不信仰を捨てなければいけません。神を疑うという不信仰を捨てなければいけないのです。それはあなたの信仰を弱らせるし、また、あなたが救われ生かされている目的である神の栄光を汚してしまうことになるからです。私たちが見なければいけないのは私たちが置かれている状況ではありません。私たちが直面している大きな問題でもありません。私たちが見なければいけないのは、その背後におられる全能の主権者なる神です。そして、その方に信頼を置くことです。その方に対して「主よ、あなたのみこころがなされますように。私を通してあなたのみ栄えが現わされ続けますように。そのためにこの不信仰な私を変えてください。疑う者になるのではなく、どんなときにもあなたに信頼を置く者に変えてください。無理だ、不可能だと思えるこの状況にあって、あなたに信頼を置き、あなたに栄光を帰す者として歩んで行くことができるように私を変えて行ってください。」と言うことです。

神の栄光が現わされること、それが私たち生きている者の目的です。そのことを私たちは一番に望んで生きているはずですが、なぜなら、この神はすべてのものからの賞賛に価する偉大な神だからです。疑うことを止めることです。神に対して疑いをもつことを止めることです。信頼に価する神を信じて、信頼し、期待して神に用いていただくことです。神はあなたを使ってくださいます。アブラハムがそうであったように。そして、あなたを通して神はみわざをなしてくださる、そのように生きたいではないですか！